

菊池川中流域の古代集落と鞠智城

能登原孝道

1. はじめに

菊池川は、阿蘇外輪山に源を発し、熊本県北部地域を西流した後、有明海に注ぐ河川で、その全長は約71kmに及ぶ。その中央部に位置する菊池川中流域は、菊池川によって育まれた肥沃な大地を背景として、弥生時代には大規模な環濠集落などが営まれ、古墳時代になるとこの地域に特徴的な装飾古墳が築かれるなど多様な文化が栄えてきた地域である。弥生・古墳時代を経て古代になり、律令国家が成立していく中で、この菊池川中流域の一角には、古代山城である鞠智城が築かれることになる。

鞠智城は、白村江の戦いにおける敗戦を契機として、唐・新羅による対外危機に対応するために築造されたとされる古代山城の一つである。7世紀後半に築造された後、10世紀半ばまでの約300年間存続したとされ（西住ほか編2012）、これまでに多くの研究者によってその役割・機能等について様々な議論がなされてきた（坂本1937、向井1991、小田1993、西住1999、甲元2006など）。また同時に、熊本県教育委員会による発掘調査が1967年から32次にわたって実施されており、その過程で多くのことが明らかとなっている。さらに、2012年にはこれまでの鞠智城跡における調査成果をまとめた調査報告書『鞠智城跡Ⅱ―鞠智城跡第8～32次調査報告―』が刊行され、その中で鞠智城における5期にわたる変遷などが明らかとなった。

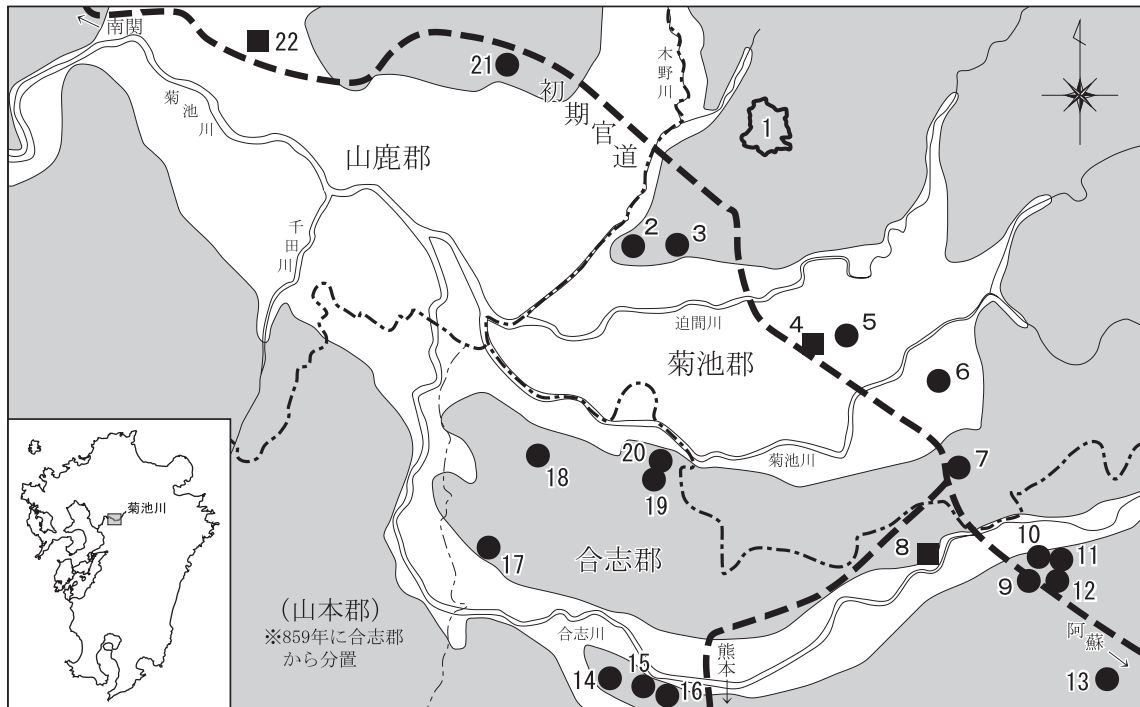
これまで鞠智城は、大和朝廷によって築城されたとされ、698年の繕治に際しては大宰府が関与する⁽¹⁾など、中央政府との関係性が深いものと考えられてきた。おそらく、築城やその後の城の存続に関しては中央政府や大宰府の関与が強かったものと考えられるが、鞠智城は肥後国菊池郡城野郷の地に営まれていたことから、肥後国あるいは菊池郡との関係性も当然あったはずであり、鞠智城の眼下に広がる菊池川中流域の地域社会とも密接な関係にあったものと考えられる。しかし、これまでの鞠智城に関する研究において、地域社会との関係性を論じるものはほとんどなかったといえよう。そこで本稿では、菊池川中流域の古代集落と鞠智城の変遷に焦点をあてながら、その関係性について論じていきたい。

2. 菊池川中流域の古代集落の様相

律令制下における地方行政区分では、全国は五畿七道に分けられ、さらにそれぞれが国・郡・里（郷）に分けられていた。そのうち、西海道に属していた肥後国は、奈良時代前半には13郡106郷302里に分かれていたとされる（『律書残篇』）。その後、平安時代になり、859年には合志郡の西部をさいて山本郡が設置され、従来の13郡から14郡に増えている。それらの郡のうち、鞠智城が所在する菊池川中流域に該当するのは、鞠智城が属する菊池郡の他、合志郡、山鹿郡である。これらの地域では、地域的な濃淡はあるものの、近年、古代集落の発掘調査事例が増加してきている。ここではまず、これら菊池郡、合志郡、山鹿郡の菊池川流域でこれまでに調査された古代の集落について概観することとする。

（1）菊池郡

菊池郡は、鞠智城が築かれた郡で、菊池川中流域の北東部に位置する。阿蘇外輪山に源を発する菊池川と筑肥山地に源を発する迫間川が中心部を西流しており、比較的広い沖積平野を形成している。また、南部は花房台地と呼ばれる洪積世の台地が阿蘇外輪山から西側に向かって広がっている。



1. 鞠智城跡 2. うてな遺跡 3. 岡田遺跡 4. 西寺遺跡(菊池郡家推定地) 5. 深川遺跡 6. 赤星福土・水溜遺跡 7. 万太郎遺跡 8. 住吉日吉神社遺跡(合志郡家推定地) 9. 伊坂上ノ原遺跡 10. 伊坂東原遺跡 11. 前畑遺跡 12. 栄ノ平遺跡 13. ワクド石遺跡 14. 八反田遺跡 15. 八反畑遺跡 16. 迫原遺跡 17. 篠原遺跡 18. 大久保遺跡 19. 小迫遺跡 20. 岩瀬・木柑子遺跡 21. 御宇田遺跡群 22. 桜町遺跡(山鹿郡家推定地)

第1図 菊池川中流域の古代遺跡分布図

郡が成立する以前の古墳時代後期には、装飾古墳として有名な袈裟尾高塚古墳や、木柑子フタツカサン古墳、木柑子高塚古墳といった大型の首長墳が築造されており、熊本県北部における中心的地域であったと考えられる。

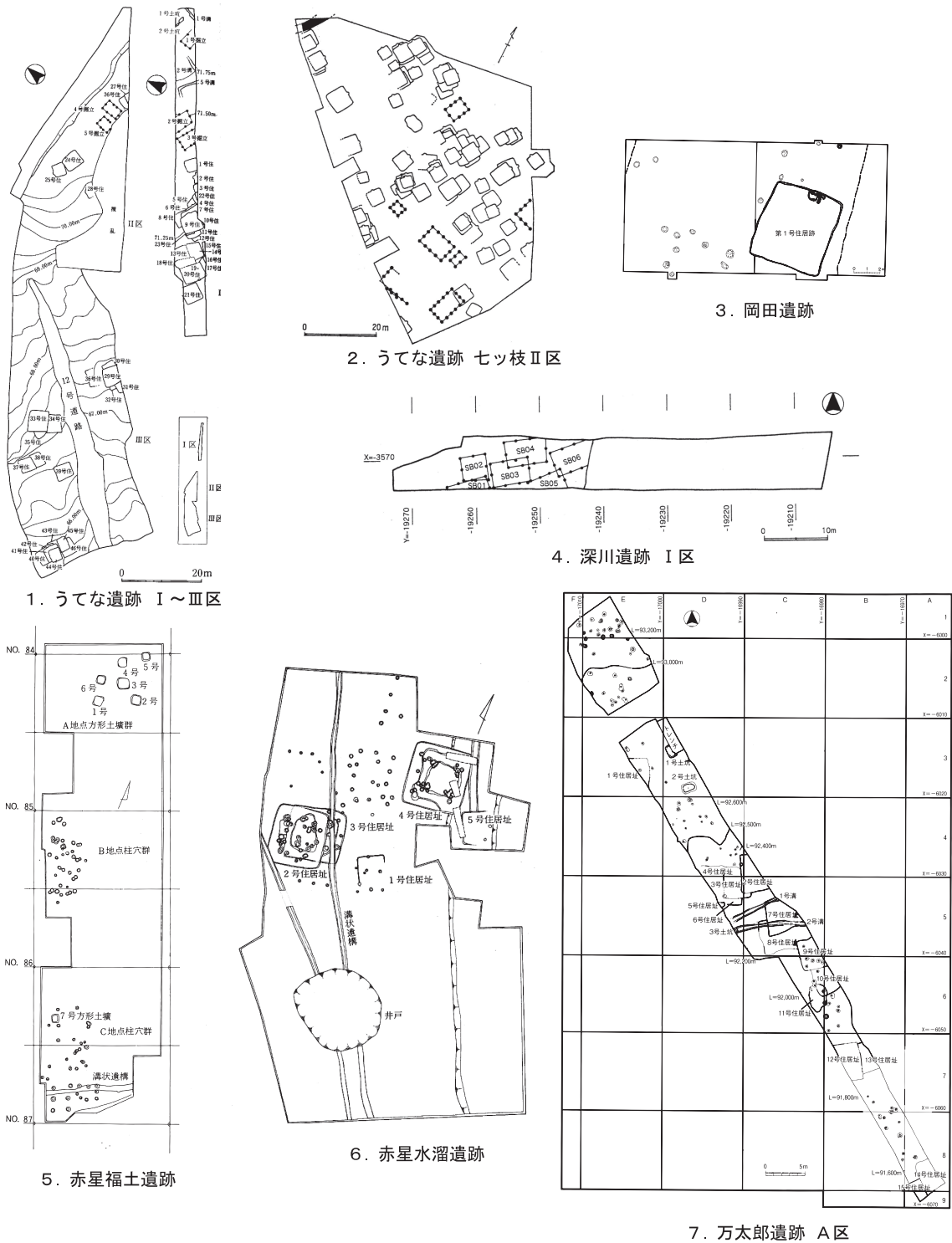
『和名類聚抄』には、城野郷、水島郷、辛家郷、夜開郷、子養郷、山門郷、上甘郷、日理郷、柏原郷の合わせて9つの郷名がみえ、中郡に相当する⁽²⁾。肥後国内では、飽田郡、山鹿郡に次いで3番目に大きな郡となる。なお、鞠智城が所在するのは菊池郡の北西部に位置する城野郷である。

郡家は、迫間川と菊池川に挟まれた沖積平野部に位置する西寺遺跡に比定されている(松本 1965)が詳細は不明である。

うてな遺跡(菊池市七城町台)(第2図-1・2)

うてな遺跡は、内田川・木野川と迫間川に挟まれた標高約70～80mの台地の西側端部に位置する。鞠智城跡からは直線で南西に約3kmと近い位置にある。これまで2次にわたり調査が行われているが、報告書が未刊行の地区があるため、その全容は不明である。報告書が刊行されたⅠ・Ⅱ・Ⅲ区では合計46軒の竪穴建物跡が確認されており、その他5棟の掘立柱建物跡、1条の道路、土坑、溝などが確認されている。報告書が未刊行の七ツ枝Ⅰ・Ⅱ区、大原Ⅰ～Ⅲ区などでは、約150軒の竪穴建物跡と20数棟の掘立柱建物跡が確認されたとされる(高木 1990)。集落の一部についてのみの調査にも関わらず200軒近い竪穴建物跡が確認されていることから、かなり大規模な集落であったと考えられる。竪穴建物跡の時期は、8世紀後半～9世紀初頭⁽³⁾であり、それ以外の時期の建物跡は見つかっていない。竪穴建物跡の中で注目されるのは33号建物跡であり、ここからは、鍛冶炉の他、鉄製品、鉄滓、ふいごの羽口などが見つかっており、鍛冶を行っていた建物であると考えられている。特徴的な遺物としては、七ツ枝Ⅱ区から三彩壺片、銅椀片、

菊池川中流域の古代集落と鞠智城



第2図 各遺跡の遺構配置図（菊池郡）

墨書土器などが出土している。出土遺物の点からも、うてな遺跡は他集落より優位な集落であったことが推定される。

岡田遺跡（菊池市七城町岡田）（第2図－3）

岡田遺跡は、迫間川の北側に広がる台地の南側端部近くに所在する。うてな遺跡からは東に約1 km、鞠智城跡からは南西に約3 kmの距離となる。遺跡からは2軒の竪穴建物跡が確認されている。これらの建物

跡の時期はおおよそ8世紀後半の時期となる。

深川遺跡（菊池市深川）（第2図－4）

深川遺跡は、迫間川と菊池川に挟まれた沖積平野上に位置する。菊池郡家と想定されている西寺遺跡から北東に数百mしか離れておらず、郡家との関係性も指摘される。鞠智城跡からは南東に約4kmの距離となる。また、推定される古代官道とも近距離の位置となる。西寺遺跡に最も近いI区からは、掘立柱建物跡が6棟確認されているが、遺物の出土がなく、時期の特定まで至っていない。また、古代の竪穴建物跡もⅢ区から2軒確認されているが、同じく詳細な時期は不明である。V区からは、幅が約8mある東西方向の大溝が見つかったが、ここからは8世紀末～9世紀初頭にかけての土器が多量に出土しており、掘立柱建物跡や竪穴建物跡もこの時期の可能性はある。特徴的な遺物としては、墨書土器の他、平瓦の破片が出土している。

赤星福土・水溜遺跡（菊池市赤星）（第2図－5・6）

赤星福土・水溜遺跡は、菊池川南岸に注ぐ小支流によって形成された沖積扇状地上に位置する。この扇状地上には微高地状の高まりがいくつもあり、赤星福土・水溜遺跡もそうした高まりの一つに形成されている。鞠智城跡からは直線で南東に約5kmの距離となり、菊池郡家と推定されている西寺遺跡からは菊池川を挟んで約2kmと近い位置にある。遺跡の西側に位置する赤星福土遺跡からは、方形土坑7基、柱穴群、溝状遺構が確認されている。このうち、方形土坑は火葬土坑墓や土坑墓と推定されているが、明確ではない（網田1997a）。方形土坑の時期は、概ね9世紀中頃～後半の時期に相当する。また、溝状遺構からは、短期間のうちに廃棄されたとみられる9世紀前半の多量の土器が出土した。また、遺跡の東側に位置する赤星水溜遺跡からは、ほぼ南北を主軸とする竪穴建物跡5軒と掘立柱建物跡3棟などが確認されている。建物跡は8世紀後半と9世紀後半を中心とする時期であり、特徴的な遺物として、越州窯青磁、黒色土器、墨書土器などが出土している。

万太郎遺跡（菊池市森北）（第2図－7）

万太郎遺跡は菊池郡の南部に位置し、菊池川と合志川に挟まれた丘陵上に所在する。標高は約90～110mであり、南側の合志川に下る緩やかな傾斜部から台地平坦部にかけて遺跡は広がっている。鞠智城跡からは直線で南東に約7kmの距離となる。遺跡からは22軒の竪穴建物跡が確認されており、台地上の建物は北西－南東に主軸をもち、傾斜部の建物は南北に主軸をもつ傾向がある。その他、2間×3間の掘立柱建物跡1棟や土坑、溝などが確認されている。また、底部幅1.0m以上の規格をもつ溝状の道路遺構が5条確認され、それぞれ複数の硬化面が存在することから頻繁な使用があったことが想定されている。これらの遺構はその出土遺物から、概ね7世紀前半～9世紀後半の時期が与えられるが、7世紀前半～8世紀前半までは建物等の数や遺物の量は少ない。8世紀後半からは徐々に集落が拡大し、8世紀末～9世紀初頭にかけて最も集落が大きくなり、9世紀前半にはほぼ廃絶するものと考えられる。特徴的な遺物としては、墨書土器などが出土している。

（2）合志郡

合志郡は、肥後国北部を流れる菊池川と中部を流れる白川に挟まれた阿蘇外輪山から西に延びる台地と、台地の中心を流れる合志川流域の沖積平野からなる。東は阿蘇郡、北は菊池郡、南は託麻郡・飽田郡、西は山本郡（859年以前は玉名郡）に接する。

『和名類聚抄』には、合志郷、小川郷、山道郷、鳥嶋郷、口益郷、鳥取郷の合わせて6つの郷名がみえ、下郡に相当する。ただし、これは859年に合志郡から山本郡が分置された後の郷数であり、山本郡分置以前は、分置後の山本郡の7郷と合わせて13郷を数える上郡であったと考えられる。これは、肥後国では最も大きい郡となり、西海道でも筑前国宗像郡に次いで2番目に大きな郡となる。

郡家は、菊池市泗水町住吉の住吉日吉神社遺跡に比定されている（坂本1965）が、詳細は不明である。

伊坂上ノ原遺跡（菊池市旭志伊坂）（第3図－8）

伊坂上ノ原遺跡は、合志川の支流である矢護川左岸の台地上に位置する。遺跡は台地上の平坦部から東側斜面下の平坦部にかけて広がっている。鞠智城跡からは直線で南東に約8kmの距離となり、合志川を隔てた北側の台地上には菊池郡に属する万太郎遺跡が存在する。これまでに3次にわたる調査が実施されており、遺跡からは、35軒の竪穴建物跡の他、2間×3間を主体とする7棟の掘立柱建物跡、4条の道路遺構などが確認されている。建物跡は7世紀後半に遡るものもあるが、ほとんどは8世紀後半～9世紀初頭にかけての時期のものであり、この時期に集落が最も拡大したものと考えられる。また、Ⅶ区で確認された幅約6mの1号道路遺構は、初期官道（車路）の豊肥支線のものである可能性が論じられている（鶴嶋1997）。特徴的な遺物としては、越州窯青磁の他、墨書土器などが出土している。

伊坂東原遺跡（菊池市旭志川辺・旭志伊坂）（第3図－9）

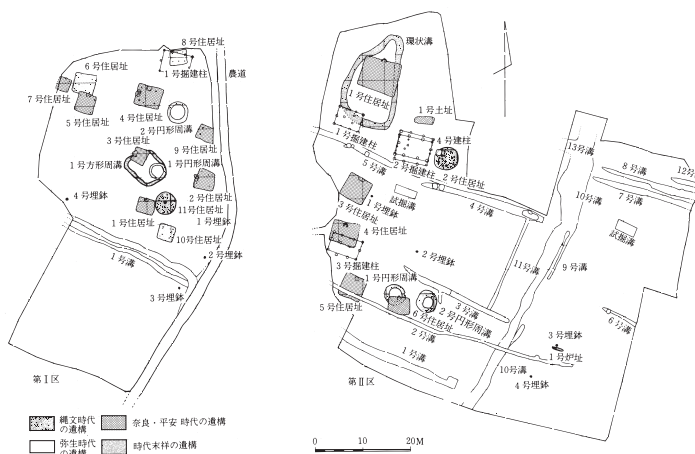
伊坂東原遺跡は、南西側を流れる矢護川と北側を流れる合志川に挟まれた平野部に位置する。矢護川を挟んだ南西側の台地上には伊坂上ノ原遺跡が広がっており、栄ノ平遺跡、前畑遺跡とも隣接する位置にある。鞠智城跡からは直線で南東に約8kmの距離となる。遺跡からは、69軒の竪穴建物跡の他、8棟の掘立柱建物跡、自然流路後道路状遺構などが確認されている。建物跡は時期が不明なものが多いものの、7世紀後半～9世紀初頭までのものが確認されている。ただし、7世紀後半～8世紀前半までの建物跡はほとんどなく、8世紀後半～9世紀初頭の時期に建物跡が急激に増える傾向にある。なお、自然流路後道路状遺構は幅が7～10mほどであるが、ここからは8世紀末～9世紀初頭の土器が多く出土している。

前畑遺跡（菊池市旭志新明）（第3図－10）

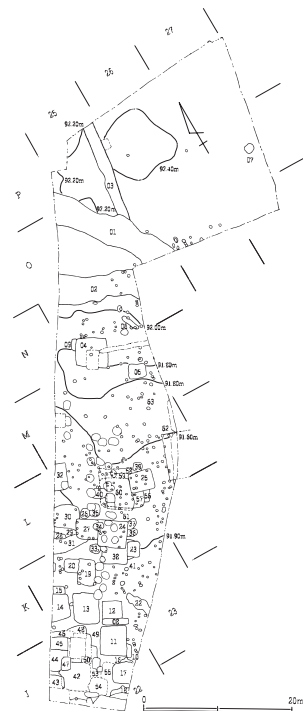
前畑遺跡は、矢護川右岸の台地の北側緩傾斜面上に位置する。同じ台地上に所在する栄ノ平遺跡のすぐ北側に位置する。鞠智城跡からは直線で南東に約8kmの距離となる。遺跡からは、31軒の竪穴建物跡の他、2間×3間を主体とする13棟の掘立柱建物跡などが確認されている。建物跡の時期は7世紀後半まで遡るものもあるが、主体となるのは8世紀後半～9世紀初頭にかけての時期である。特徴的な遺物としては、刻書・墨書土器の他、石製分銅などが出土しており、調査者によって、官衙などの公的施設の周辺に造営された集落と位置づけられている。

栄ノ平遺跡（菊池市旭志新明）（第3図－11）

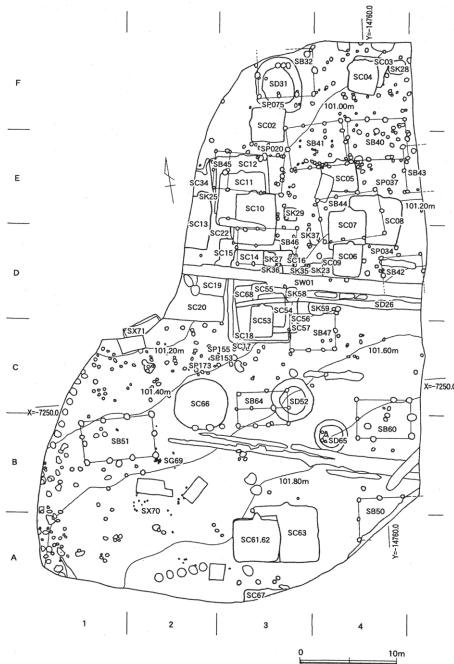
栄ノ平遺跡は、合志川の支流である矢護川右岸の台地上の裾部近くに位置する。矢護川を挟んだ対岸の台地上には伊坂上ノ原遺跡が存在する。鞠智城跡からは直線で南東に約8kmの距離となる。遺跡からは、32軒の竪穴建物跡の他、6棟の掘立柱建物跡、道路遺構などが確認されている。建物跡の時期は、8世紀末～9世紀初頭の時期が主体となる。



8. 伊坂上ノ原遺跡 第Ⅰ・Ⅱ調査区



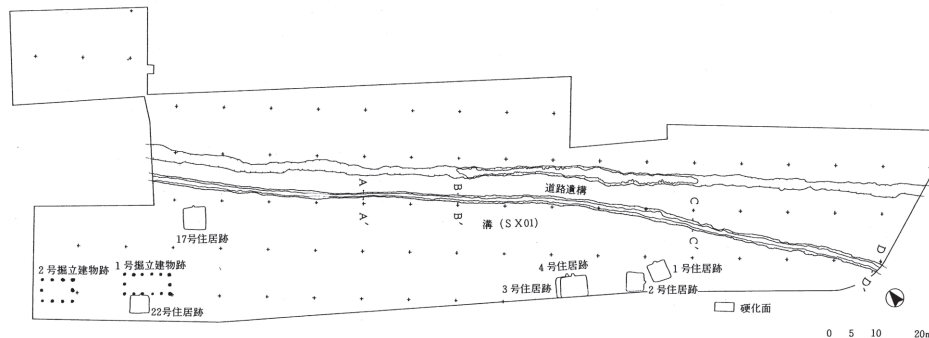
9. 伊坂東原遺跡 C区



10. 前畑遺跡 A区



11. 栄ノ平遺跡 B区



12. ワクド石遺跡

第3図 各遺跡の遺構配置図(合志郡1)

ワクド石遺跡（菊池郡大津町杉水）（第3図－12）

ワクド石遺跡は、合志川の支流である峠川左岸の台地上にあり、川が流れる沖積面と台地上の洪積面との間に20～30mの比高差がある。ワクド石遺跡はその台地と谷部の境界である崖部付近にかけて遺跡が広がっている。鞠智城跡からは直線で南東に約11kmの距離となる。遺跡からは、6軒の竪穴建物跡の他、2棟の掘立柱建物跡などが確認されている。建物跡の時期は8世紀後半～9世紀初頭にかけての時期と考えられる。遺跡からは集落を囲むか区切る溝が、現状で長さ約150m分見つかっており、幅は2～4m、深さは0.6～1.6mを呈する。また、この溝に沿って道路遺構も確認されている。

八反田遺跡（合志市合生）（第4図－13）

八反田遺跡は、合志川左岸の標高70m前後の台地上に位置する。周辺の水田面や河川との比高差は約20～25mを測る。鞠智城跡からは直線で南西に約10kmの距離となる。遺跡からは、A地区から4軒、B地区から68軒の竪穴建物跡が確認されている。特にB地区においては建物跡の重複がかなり激しい。建物跡の時期は7世紀後半まで遡るものもあるが、そのほとんどは8世紀後半～9世紀初頭にかけての建物跡である。特徴的な遺物としては墨書土器などが出土している。

八反畑遺跡（合志市合生）（第4図－14）

八反畑遺跡は、八反田遺跡と同じく、合志川左岸の標高70m前後の台地上に位置する。八反田遺跡との距離は約400mで一連の集落と捉えてもよいものとする。鞠智城跡からは直線で南西に約10kmの距離となる。遺跡からは22軒の竪穴建物跡が確認されているが、遺構の重複が激しい。これらの建物跡は全て8世紀後半～9世紀初頭にかけてのものである。

迫原遺跡（合志市合生）（第4図－15）

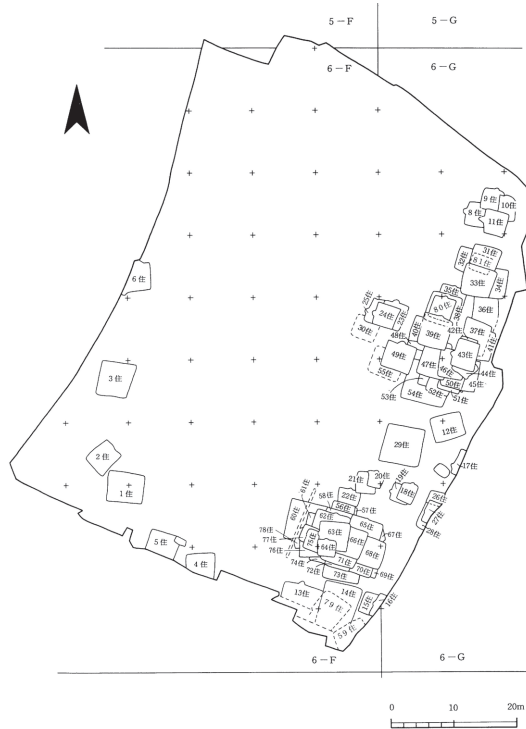
迫原遺跡は、八反田遺跡、八反畑遺跡と同じく、合志川左岸の標高70m前後の台地上に位置する。八反畑遺跡から東に約100mの位置となり、台地上のほぼ全域に古代の集落が広がっているものと考えられる。鞠智城跡からは直線で南西に約10kmの距離となる。遺跡からは54軒の竪穴建物跡が確認されているが、遺構の重複が激しい。7世紀後半に遡る建物跡や8世紀後半の建物跡が少数あるものの、主体となるのは8世紀末～9世紀初頭にかけての建物跡である。特徴的な遺物として墨書土器の他、刀子などの鉄製品が出土している。

篠原遺跡（菊池市泗水町田島）（第4図－16）

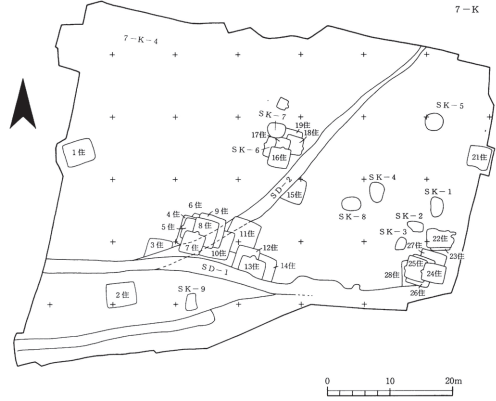
篠原遺跡は、合志川北岸に広がる花房台地の南端部に位置する。鞠智城跡からは南西に約8kmの距離となる。遺跡からは26軒の竪穴建物跡が確認されている。そのうち、SI123号建物跡からは鉄滓が多数出土しており、鍛冶に関わる建物であったと考えられている。また、掘立柱建物跡が7棟確認されている。建物跡の時期は全て8世紀末～9世紀初頭にかけてのものである。また、特徴的な遺物として墨書土器が多数出土している。

大久保遺跡（菊池市七城町林原）

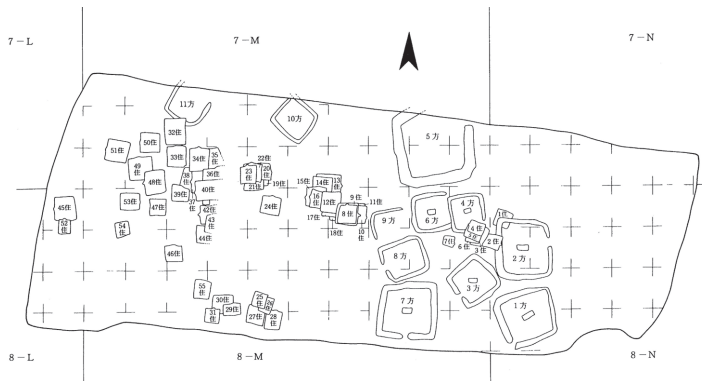
大久保遺跡は、標高約70mの台地の平坦部から南斜面上に位置する。鞠智城跡からは南西に約6kmの距離となる。遺跡からは、1軒の竪穴建物跡と3棟の掘立柱建物跡が確認されている。出土した土器から、8世紀末～9世紀初頭にかけてのものと考えられる。特徴的な遺物として、墨書土器の他、権形石製品、布



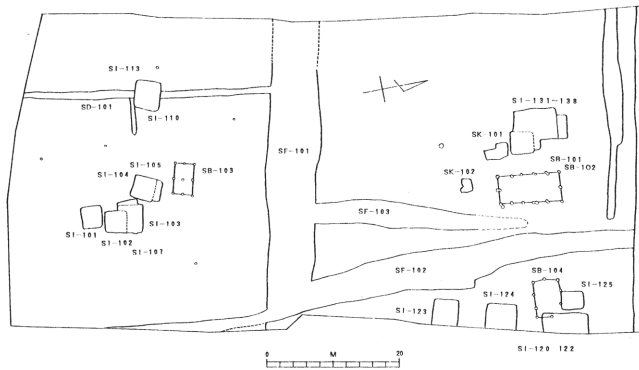
13. 八反田遺跡 B地区



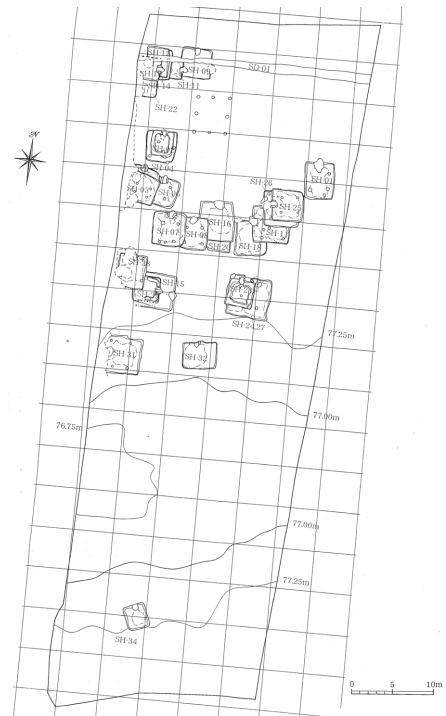
14. 八反畑遺跡



15. 迫原遺跡



16. 篠原遺跡 A調査区



17. 小迫遺跡 II区

第4図 各遺跡の遺構配置図（合志郡2）

目瓦片などが出土している。

小迫遺跡（菊池市七城町亀尾）（第4図－17）

小迫遺跡は、菊池川南岸の花房台地と呼ばれる標高約70mの台地の北端部に位置し、菊池郡と合志郡の

境界近くに所在する。鞠智城跡からは南西に約7kmの距離となる。遺跡の北側約500mには古代の建物跡が確認されている岩瀬・木柑子遺跡が所在し、これらは一連の集落と推定される。遺跡からは、33軒の竪穴建物跡が確認されており、2間×2間の掘立柱建物跡も1棟確認されている。出土した土器からは8世紀後半～9世紀初頭を中心とする時期が想定される。特徴的な遺物として墨書土器が出土している。

岩瀬・木柑子遺跡（菊池市七城町岩瀬・木柑子）

岩瀬・木柑子遺跡は、菊池川南岸の花房台地上に位置する。鞠智城跡からは南西に約7kmの距離となる。遺跡の南側約500mには小迫遺跡が所在し、おそらく一連の集落であったと推定される。トレンチ状の狭い調査区のため遺構の内容が不明瞭な部分もあるが、13軒の竪穴建物跡が確認されている。出土した土器から、およそ8世紀末～9世紀初頭にかけての建物跡と考えられる。調査面積が狭いにも関わらず墨書土器が46点と多量に出土していることが特徴として挙げられる。

（3）山鹿郡

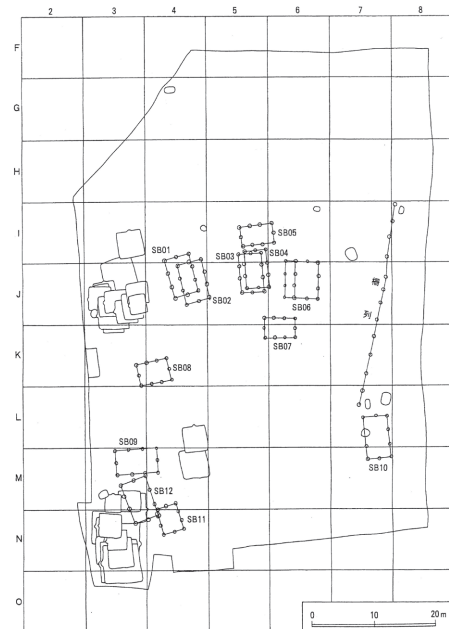
山鹿郡は、北部は筑肥山地がそびえ、南部は蛇行しながら西流する菊池川によって形成された沖積平野が広がる。東は菊池郡、西は玉名郡、南は山本郡（859年以前は合志郡）、北は筑後国八女郡に接する。

『和名類聚抄』には、箸入郷、来民郷、伊智郷、夜開郷、緒緑郷、津村郷、神西郷、温泉郷、小野郷、朽納郷の合わせて10の郷名がみえ、中郡に相当する。肥後国では12郷を数える飽田郡に次いで2番目に大きい郡となる。

郡家は、布目瓦や多量の須恵器・土師器の出土から山鹿市桜町付近に比定されている（工藤1985）が、詳細は不明である。

御宇田遺跡群（山鹿市鹿本町御宇田）（第5図－18）

御宇田遺跡群は、菊池川右岸の丘陵上に位置している。この丘陵は、北側を流れる吉田川によって開析され、西に向かって舌状に長く延びているが、御宇田遺跡群は、その丘陵南辺に所在する。鞠智城跡からは直線で西に約6kmの距離となる。報告書が未刊行であるため詳細は不明であるが、7～8世紀のものとされる竪穴建物跡が各地区から合計76軒確認されている。また、8～9世紀のものとされる掘立柱建物跡が妙見Ⅱ区を中心として合計60棟確認されている。これらの掘立柱建物群は、整然とした配置を示すことから、官衙的建物群と想定されている。また、特徴的な遺物として石製巡方や円面硯、越州窯青磁、緑釉陶器などが出土している。おそらく7～8世紀に集落が展開した後、8～9世紀に官衙的建物群が造営されたものと考えられる。ただし、個別の土器の提示がないため、集落の消長等については不明である。



18. 御宇田遺跡群 虎ヶ迫地区
第5図 各遺跡の遺構配置図（山鹿郡）

3. 菊池川中流域の古代集落の変遷

これまで、菊池川中流域の古代集落について、郡ごとにその様相をまとめてきた。どの遺跡においても、集落の構成要素としては竪穴建物が主体となり、それに掘立柱建物が付随するようなあり方がみてとれる。

また、この地域では9世紀初頭の段階でも竪穴建物がかなり残るようであり、掘立柱建物が主体的になるような様相はみられない⁽⁴⁾。また、道路遺構が数多く確認されているのがこの地域の特徴であり、中には初期官道になると考えられるものも存在する（伊坂上ノ原遺跡）（鶴嶋 1997）。また、特徴的なものとして、鍛冶を行っていた建物が確認された集落も存在する（うてな遺跡、篠原遺跡）。その他、集落を区切る溝が存在するところもある（ワクド石遺跡）。

また、遺物の面からは、墨書土器を出土する遺跡が多いことが指摘できる。文字には様々なものがあり、それらが示す意味は不明なものが多いが、字を理解する階層の人が各集落に居住していたことを示すものとなる。また、遺跡によっては、三彩壺や越州窯青磁など、一般の集落では入手しにくいであろう遺物が出土する集落がある（うてな遺跡、赤星水溜遺跡、伊坂上ノ原遺跡）。集落間でもある程度の階層化が進んでいたことを示すものと思われる。

このように各集落におけるそれぞれの構成要素には様々なパターンが想定され一様ではない。そのような中、この地域の集落において特に共通的なこととして捉えることができるのが、集落の消長の時期である。つまり、この地域の集落における変遷の特徴として、8世紀後半～末にかけて新たに集落が展開し、建物等が急増する傾向が認められるのである（第1表）。この地域においては、7世紀後半から若干の竪穴建物が存在するが、その数は少ない。また、7世紀後半から8世紀に継続する集落も少なく、8世紀前半の竪穴建物はほとんど確認されていない。しかし、8世紀後半～末になるとそれまでに集落が展開していなかった

第1表 菊池川中流域の遺跡消長表

時 期		700			800			900	
鞠智城編年 (西住ほか編 2012)		I 期	II 期	III 期			IV 期		V 期
網田編年 (網田 1994)		I 期		II 期	III 期	IV 期	V 期	VI 期	
菊池郡	うてな遺跡								
	岡田遺跡								
	深川遺跡								
	赤星福土・水溜遺跡								
	万太郎遺跡								
合志郡	伊坂上ノ原遺跡								
	伊坂東原遺跡								
	前畑遺跡								
	栄ノ平遺跡								
	ワクド石遺跡								
	八反田遺跡								
	八反畑遺跡								
	迫原遺跡								
	篠原遺跡								
	大久保遺跡								
	小迫遺跡								
	岩瀬・木柑子遺跡								
	山鹿郡	御宇田遺跡群							

場所に新たに集落が出現し、建物等の数が急増するのである。菊池川中流域の古代集落はほぼ一斉にこの8世紀後半～末の時期に新たに展開、急増するといえる。なお、8世紀後半～末にかけて出現する集落も9世紀初頭頃までは続くものの、9世紀前半以降継続する集落は少ない。9世紀前半になると再び建物等の数は急減する傾向にある。ところで、菊池川中流域以外の肥後国内の古代集落においても、8世紀後半頃から集落が展開、急増するところが多くみられる。宇土郡の曲野遺跡、託麻郡の大江遺跡群・新屋敷遺跡・陣山遺跡、飽田郡の二本木遺跡群、合志郡の楠ノ木遺跡などはその例である。つまり、8世紀後半～末にかけては、菊池川中流域のみでなく、肥後国全体で集落が新たに展開、急増する傾向があるといえよう。

それでは、この8世紀後半～末にかけての菊池川中流域、そして肥後国内における集落の新たな展開、急増の背景にあるものは何であろうか。それには、様々な政治的、社会的、経済的要因が複雑に絡んでいるものと考えられるが、そのうちの主要な要因として、この時期に菊池川中流域を含めた肥後国内において水田の開発が進んだ可能性を挙げたい。水田の開発が進んだ結果、生産力の発展と人口の増加がおき、8世紀後半～末にかけて集落が新たに展開、急増したのではないだろうか。その理由として、まず当時の社会背景を考えてみると、722年には、国・郡司が食料を支給して農民を10日間徴発し、百万町歩の新たな水田を開発しようとする百万町歩開墾計画が出される。また翌年の723年には溝や池などの灌漑施設を新設して開墾した水田は三世まで収公しないとする三世一身法が出され、743年には墾田の永年私財化を認める墾田永年私財法が出されるなど、律令国家における土地政策の大転換が図られた。また、8世紀には条里制が広い地域で施行されるなど、土地管理のシステムも同時に整えられていく。このような過程の中で、8世紀代の菊池川中流域、そして肥後国内においても、国司と結びついた郡司や有力農民層が、新たな水田の開発を積極的に推進していったことが想定されよう⁽⁵⁾。

また、10世紀前半に編纂された『和名類聚抄』によると、肥後国における田数は、西海道の総田数104,848町のうち、23,500町と総田数の約22.4%を占め、肥後国は西海道の中で最も水田面積が広い国だったことがわかる(板楠1998)(第2表)。そのうち、菊池川中流域は肥後国内でも奈良・平安時代において郷の数が多く、人口も多かったと推定される地域であり、また現代においても日本国内で有数の良質の米の産地であるように肥沃な土壌に恵まれていることから、肥後国内における水田のうちの少なくない面積を菊池川中流域が占めていたであろうことが推測できる。特に、菊池川中流域においては、菊池条里区、大琳寺条里区、菊鹿条里区、鹿本条里区、来民・御宇田条里区、岩野川流域の条里、合志川流域の条里の7ヶ所にのぼる条里区が想定されており(熊本県教育委員会編1977)、肥後国内においてもかなり広範囲にわたって条里が整備されていた地域といえ、生産性も高かったものと推定される。

また、9世紀前半に編纂された『弘仁(主税)式』における出挙稲数も、肥後国は西海道の他の国と比べ大幅に大きく、大宰府財政において肥後国が中心的な位置を占めていたことがわかる(板楠1998)(第3表)。

これらの史料は、8世紀後半～末とは時期的な隔りがあるものの、菊池川中流域を含めた肥後国における8世紀後半～末の新たな水田開発の結果を反映している可能性が高いものとする。なお、795年に肥後国は西海道で唯一大国に昇格した(『日本紀略』)が、それは菊池川中流域を含めた肥後国の8世紀後半～末における水稻耕作を中心とする生産力の発展に伴う経済力の上昇による可能性が高いものとする⁽⁶⁾。

これまで述べてきたことから、菊池川中流域をはじめとする肥後国内における8世紀後半～末における集落の新たな展開と急増の背景には、

第2表 『和名抄』各国田数

国 名	田数(町)
筑 前	18,500
筑 後	12,800
肥 前	13,900
肥 後	23,500
豊 前	13,200
豊 後	7,500
日 向	4,800
大 隅	4,800
薩 摩	4,800
壱 岐	620
対 馬	428
合 計	104,848

第3表 『弘仁（主税）式』出挙稻数

国 名	正 税	公 廩	国 分 寺 料	府 官 公 廩	合 計
筑 前	20	20	4	15	59
筑 後	20	20	2	10	52
肥 前	20	20	4 当国・壹岐対馬各2万束	15	59
肥 後	40	40	8 当国6万束、薩摩2万束	35	123
豊 前	20	20	2	10	52
豊 後	20	20	2	15	57
日 向	15	15	3 当国1万束、大隅2万束		33
大 隅	6	6			12
薩 摩	6	6			12
合 計	167（万束）	167（万束）	25（万束）	100（万束）	459（万束）

墾田永年私財法などの土地政策と条里の整備によって、新たな水田開発が積極的に進められた結果、生産力の発展と人口の増加が起こった可能性を想定することができよう。

なお、菊池川中流域においては古墳時代後期後半においても水稻耕作を中心とする生産力の発展があったことが指摘されている（木村 2011）が、おそらく8世紀後半～末には、古墳時代後期後半よりもさらに大規模な生産力の発展が起こったものと考えられる。

4. 鞠智城の変遷とその機能

菊池川中流域において、7世紀後半から10世紀半ばまで約300年間存続したのが鞠智城である。鞠智城は、菊池郡の北西部に位置する城野郷に所在し、城の西を流れる木野川を挟んで山鹿郡とほぼ接する位置にあたる。鞠智城の北側には筑肥山地がそびえ、そこから南に向かうにしたがって地形は次第に低く平坦になり、大小の台地や谷が存在する。鞠智城は、そのような台地の一つである標高約145mを測る米原台地の上に築造されている。鞠智城跡では、これまで長年にわたって発掘調査が実施され、72棟にのぼる建物跡の他、3ヶ所の城門跡、土塁跡、貯水池跡などの遺構が確認されるとともに、百済系銅造菩薩立像、木簡、瓦、木製品、須恵器、土師器などの遺物が出土している。そして、これら一連の調査成果をまとめた調査報告書が2012年に熊本県教育委員会から刊行され、その中で鞠智城の変遷についてⅠ～Ⅴ期に分けた整理が行われている（第4表）。

調査報告書によると、鞠智城Ⅰ期は、7世紀第3四半期～7世紀第4四半期の時期で、鞠智城の創建期にあたる。この時期に台地中央部に掘立柱建物群が建てられるとともに、3ヶ所の城門や土塁線が整備され、貯水池が造営された。この鞠智城Ⅰ期に、対外的な危機に備えた古代山城の最低限の機能が備わったとされる。鞠智城Ⅱ期は、7世紀末～8世紀第1四半期前半の時期にあたる。この時期には、「コ」の字形に配置された掘立柱建物群や八角形建物が出現し、Ⅰ期よりも内部施設の充実が図られた時期とされる。このような状況は、『続日本紀』に記された鞠智城の繕治記事（698年）に対応するものと考えられている。また特に、この時期の土器の出土量が全時期を通じて最も多いことから、多くの人員が配置され、活発な活動が行われていたことが想定されている。鞠智城Ⅲ期は、8世紀第1四半期後半～8世紀第3四半期の時期で、

礎石建物が出現する時期とされる。また、Ⅱ期に出現した管理棟的建物群なども存続するとされる。しかし、この時期の土器が全く出土していないため、城の活動は活発ではなかったものと考えられている。鞠智城Ⅳ期は、8世紀第4四半期～9世紀第3四半期の時期で、礎石建物が大型化する時期とされる。この時期には貯水池中央部の維持管理作業が行われなくなり、主要な城門である池ノ尾門も維持管理作業が行われていなかった可能性がある⁽⁷⁾。城の機能としては、礎石建物の倉庫に食料等を備蓄する施設としての機能が大きくなると考えられている。鞠智城Ⅴ期は、9世紀第4四半期～10世紀

第4表 鞠智城跡変遷表

年代	鞠智城跡の変遷	関連事項
7C	3 鞠智城Ⅰ期 掘立柱建物の建築 城門の構築（深迫・堀切・池ノ尾門） 貯水池の造成 土塁線の構築	・白村江の敗戦（663） ・防人・烽設置（664） ・長門国城築城（665） ・大野・櫛城築城（665） ・金田・屋嶋・高安城築城（667）
	4 鞠智城Ⅱ期	・大野・基肆・鞠智城繕治（698） ・稲積・三野城繕治（699） ・高安城修理（698・699）
8C	1 建物配置の改変	・高安城廃城（701） ・備後国茨城・常城停める（719）
	2 礎石建物の出現	
	3	
	4 礎石建物の大型化 池中心部廃絶	・肥後国が大国に昇格（795）
9C	1	
	2	
	3 鞠智城Ⅴ期	・菊池城院、兵庫鼓鳴。不動倉11 宇火（858） ・肥後国山本郡設置（859） ・菊池郡城院、兵庫戸鳴（879）
	4 礎石建物の再建	
10C	1	
	2	
	3 廃城	

第3四半期の時期で、礎石建物の倉庫が焼失した後に、さらに大型の礎石建物の倉庫を建て直していることから、倉庫としての機能が主流だったと考えられている（西住ほか編 2012）。

また、鞠智城の役割・機能についても、これまで多くの議論がなされてきた。最初に鞠智城の役割・機能について言及したのは坂本経堯氏である。坂本氏は、1937年に「鞠智城址に擬せらる米原遺跡に就て」と題した論文を発表し、その中で鞠智城の役割として、「有明海に侵入する敵の確認と伝達」、「物資・兵器を蓄えて、大宰府の非常に備える」、「九州南部の熊襲族に対する重鎮」の3つを挙げた（坂本 1937）。その後、近年になって、古代山城の役割・機能論についての議論が高まる中で、向井一雄氏は、鞠智城は大宰府陥落後の九州内の拠点として用意されたと想定した（向井 1991）。また、小田富士雄氏は、鞠智城は白村江の戦いにおける敗戦を契機とする対外危機に対応する目的で築城されたが、9世紀代には大野城、基肆城と同様に周辺地域の治安警備の機能を果たしていたであろうと推定した（小田 1993）。また、西住欣一郎氏は、

鞠智城は創建期と改築期（698 年）以後とではその主となる機能が異なると考え、創建期の鞠智城は大宰府が陥落した時の控えの拠点として準備された第 2 大宰府の性格をもつものと考え、改築期以降は、南九州を背後より統括する役割を担う城としての機能をもつようになったと想定している（西住 1999）。そして、甲元眞之氏は、初期段階は政庁風遺構配置をとることから、斉明期に朝倉宮が陥落した場合の行宮として構想され、7 世紀後半に大宰府が都城として整備されたのに伴い、山城としての機能を果たすようになり、8 世紀前半以降は、南九州の動乱に備える機能を果たしたと 3 段階の機能変化を想定している（甲元 2006）。それぞれ、基本的には鞠智城が城として機能したと考えるところは共通しているが、その城としての役割については各論があり、評価が定まっていないのが現状としてある。

これまで、鞠智城の 5 期にわたる変遷、及び機能に関する研究史をまとめてきたが、鞠智城の変遷、及び機能を考える上で重要な位置づけをなしてくるのは、鞠智城Ⅰ～Ⅴ期のうち、鞠智城Ⅳ期（8 世紀第 4 四半期～9 世紀第 3 四半期）であると考えられる。それは、鞠智城Ⅱ期までの鞠智城の機能が鞠智城Ⅳ期になると大きく転換すると考えるからである。

鞠智城Ⅰ・Ⅱ期、つまり、鞠智城の築城から繕治にかけての時期は、防衛拠点（城）としての機能を主体的にもっており、そのための様々な整備、及び内部構造の充実化が図られた時期といえる。城門、土塁の整備によって城の防備が固められるとともに、貯水池及び八角形建物をはじめとする各種建物の設置により、城としての機能性の充実が図られている。また、698 年に大野城、基肄城とともに、繕治（修理）が行われていることも、古代山城のネットワークの中で、城としての機能の充実を図り、古代山城による防衛網をより強化する意味があったものと考えられる。

しかし、鞠智城Ⅳ期になると、鞠智城が防衛拠点（城）として機能していたという状況は積極的には認められない。この鞠智城Ⅳ期には、鞠智城Ⅰ・Ⅱ期において重要な役割を果たしていた貯水池の中央部分の維持管理が行われなくなり、貯水池が徐々に埋没していく状況が見受けられる。また、これまで鞠智城で確認されている深迫門、堀切門、池ノ尾門の 3 つの城門のうち、石塁や盛土状遺構等により最も堅固に築造され、鞠智城の防備の点において最重要な門であったと考えられる池ノ尾門において、この鞠智城Ⅳ期には、石塁の下を通る暗渠状の通水溝が詰まりつつある状況が確認され、この時期には、貯水池中央部分と同様に池ノ尾門における維持管理の作業も行われなくなっていたものと考えられる。その反面、台地頂部の平坦部に位置する長者原地区においては、これまでの時期とは異なり、大型の礎石建物が数多く建てられるような状況がみられる。このような状況から鞠智城Ⅳ期においては、防衛拠点（城）としての機能はほぼなくなり、大型の礎石建物による倉庫群の存在から、稲穀などの貯蔵・保管施設としての機能を主に果たしたものと考えられる。その機能は、鞠智城Ⅴ期になっても継続していったものと考えられよう。

なお、鞠智城Ⅱ期とⅣ期の間の時期となる鞠智城Ⅲ期の位置づけであるが、この時期は、礎石建物が初めて出現するとともに、鞠智城Ⅱ期からの建物群も存続するとされている（西住ほか編 2012）が、この時期の土器が城内から全く出土していないという点を重視するのであれば、この鞠智城Ⅲ期には、鞠智城における諸活動は停止していたと考えることができよう⁽⁸⁾。この鞠智城Ⅲ期における状況は、701 年に高安城が廃止（『続日本紀』）、719 年に茨城、常城が停止（『続日本紀』）となる古代山城をめぐる一連の動きと連動しているものと考えられる。

以上述べてきたように、鞠智城は、鞠智城Ⅰ・Ⅱ期においては、対外危機等に対応するための防衛拠点（城）としての機能を果たすが、鞠智城Ⅲ期になるとその機能を終え、鞠智城Ⅳ期になって稲穀などの貯蔵・保管施設という新たな機能をもつことになったと考える。その点で、鞠智城Ⅳ期は、約 300 年間に及ぶ鞠智城の変遷の中で、大きな転換点になった時期であるといえよう。

5. 菊池川中流域の古代集落と鞠智城Ⅳ期の関係について

これまでに菊池川中流域の古代集落については、7世紀後半～8世紀前半において集落はほとんど展開しないものの、8世紀後半～末段階になると一斉に集落が新たに展開、急増することを明らかにし、肥後国内の他地域においても同様の傾向がみられることを指摘した。また、鞠智城については、鞠智城Ⅱ期までは、防衛拠点（城）としての機能を果たすものの、鞠智城Ⅲ期にはその機能を終え、鞠智城Ⅳ期から新たに稲穀などの貯蔵・保管を主たる機能として存続していったことを述べてきた。この菊池川中流域の古代集落と鞠智城における2つの変遷過程であるが、これらはお互いに無関係のものではなく、密接に関係するものとして捉えられるべきであると考ええる。

これまで述べてきたとおり、菊池川中流域においては、墾田永年私財法などといった新たな土地政策や、条里制という土地管理システムの整備とともに、地域内の水田開発が積極的に行われ、そのことが8世紀後半から集落が新たに展開、急増することに現れていると考えた。このような現象は、肥後国内の他地域においても同様であったと考える。そのような状況が菊池川中流域をはじめとする肥後国内で生じている時期に、鞠智城は鞠智城Ⅳ期を迎える。鞠智城Ⅳ期にはこれまで述べてきたとおり、防衛拠点（城）としての機能を失っていたであろう鞠智城内に新たに礎石建物の倉庫群が多数建てられるようになる。これらの倉庫は、主に稲穀貯蔵用のものが多かったと考えられる⁽⁹⁾が、これら稲穀貯蔵用の倉庫が多数建てられた背景には、菊池川中流域をはじめとする肥後国内において、これまでに述べてきた8世紀後半～末における生産力の発展に伴い、大量に生産・収穫されるようになった稲穀を貯蔵する目的があったものと考ええる。

鞠智城の地に稲穀を大量に貯蔵した目的を考える上で参考になるのが、大宰府跡不丁地区から出土した基肄城に貯蔵された稲穀に関する木簡である。これは8世紀前半の木簡で「為班給筑前筑後肥等国遣基肄城稲穀随 大監正六上田中朝□」と記されている。これは、基肄城に貯蔵されている稲穀を筑前・筑後・肥などの諸国に班給するために、大宰府の官人が派遣されたことを記した木簡であるが、この木簡からは、基肄城内に非常の時などのために稲穀が貯蔵されており、それが大宰府によって管理されていたことがわかる（板楠 2012b）。おそらく、鞠智城Ⅳ期になって新たに鞠智城の地に建てられた倉庫群は、基肄城の稲穀と同じように非常の時に備えた稲穀を貯蔵する目的をもって建てられ、飢饉や不作などの非常の際には、肥後国をはじめとして、他の西海道諸国（特に肥後国の地理的な位置を考えるならば、薩摩、大隅、日向などの九州南部の諸国が中心であったと考えられる）に稲穀を班給していた可能性が考えられよう⁽¹⁰⁾。なお、基肄城の稲穀に関する木簡や、鞠智城の倉庫群の構造・規模等から考えると、鞠智城内の倉庫群は、肥後国や菊池郡に管理されたようなものではなく、大宰府によって管理されていたものと考えられる。9世紀代になり『日本文徳天皇実録』や『日本三代実録』といった正史に「菊池城院」、「菊池郡城院」⁽¹¹⁾として記事が残されたのも、大宰府の管理下におかれる重要な倉庫群であったからこそであると考えられる。

なお、鞠智城の地に稲穀などの貯蔵・保管施設（倉庫群）が鞠智城Ⅳ期に新たに建てられることになった背景には、鞠智城が肥後国内において、菊池川中流域という大穀倉地帯の中に位置していたこと、菊池川が近くを流れ、また、古代官道が近くを通るなど交通の便に恵まれていたこと、そして、それまで中央政府・大宰府が管理する城として営まれていたため、同じく中央政府・大宰府が管理する倉庫群として利用される素地があったことなどが考えられる。

6. おわりに

本稿では、菊池川中流域を中心とする古代集落と鞠智城の変遷とその関係性について明らかにしてきた。菊池川中流域を中心とする古代集落については、8世紀後半～末に新たに一斉に展開、急増する傾向があることを明らかにし、鞠智城については鞠智城Ⅱ期までの防衛拠点（城）としての機能から、鞠智城Ⅳ期以降

は、稲穀などの貯蔵・保管施設としての機能に転換したことを指摘した。そして、菊池川中流域をはじめとする肥後国内の古代集落が8世紀後半～末に新たに展開・急増することは、新たな水田開発に伴う生産力の発展と大きく結びついており、その生産力の発展の結果、鞠智城において鞠智城Ⅳ期に稲穀などを貯蔵・保管する倉庫群が建てられたのではないかと考えた。

これまで鞠智城は、中央政府や大宰府との関係性の中でその変遷や機能が語られることが多かったが、鞠智城の眼下に広がる菊池川中流域の地域社会、そして肥後国とも密接な関係をもちながら変遷した可能性があることが本稿において明らかとなったといえよう。

なお、今回は7世紀後半から8世紀前半にかけて、鞠智城が防衛拠点（城）として機能していた時期における菊池川中流域の古代集落の様相、そして鞠智城との関係等については不明な点が多く考察できなかった。また、肥後国内の古代社会の様相や菊池川中流域の古代集落の特徴について明らかにするには、肥後国内における他地域の集落の検討も必要であったが、今回はそこまで至らなかった。今後の検討課題としたい。

本稿を作成するにあたり、多くの方々にご指導・ご助言を頂くとともに、資料調査等において様々な便宜を図って頂きました。末筆ながら記して感謝申し上げます。

網田龍生、木村龍生、後藤克博、佐藤 信、長 直信、早川和賀子、水上公誠、矢野裕介（敬称略 50音順）

〈註〉

- (1) 『続日本紀』文武天皇2（698）年5月条に「令大宰府繕治大野、基肄、鞠智三城」とある。
- (2) 郡の規模は管轄する郷の数によって5つに分けられ、20～16郷の郡を「大郡」、15～12郷を「上郡」、11～8郷を「中郡」、7～4郷を「下郡」、3～2郷を「小郡」としていた（『養老令』戸令定郡条）。
- (3) 時期の根拠となる土器の編年観は、網田龍生氏の編年に拠った（網田1994・1999）。網田編年においては、Ⅰ期：7世紀後半～8世紀初頭、Ⅱ期：8世紀前半、Ⅲ期：8世紀中葉、Ⅳ期：8世紀中葉～後半、Ⅴ期：8世紀後半、Ⅵ期：8世紀末～9世紀初頭と区分されており、本稿における時期表記も網田編年に拠っている。
- (4) 肥後国においては、概ね9世紀前半頃まで竪穴建物が残ることが網田龍生氏によって明らかにされている（網田1997b）。
- (5) 当時の社会的背景から8世紀代に水田の開発が進んだであろうことが推定されるが、肥後国で考古学的に古代の水田跡がこれまでに確認されたのは大江遺跡群の例（網田2013）を除くとほとんどなく、水田跡の変遷等から水田の開発を裏付けることは現段階では難しい状況である。今後の検討課題といえよう。
- (6) 他国の例をみると、経済力だけが国の等級を決定する要因とはなっておらず、当時の政治的要因を考えていく必要があるという指摘がある（板楠1998）が、肥後国における他国を圧倒する水田面積、出挙稲数などを考えると、新たな水田開発からもたらされた経済力が、肥後国が大国になった大きな要因と考えてもよいのではないだろうか。
- (7) 鞠智城Ⅳ期には、貯水池中央部（28トレンチ）では池底に堆積した泥をすくう等の維持管理作業が行われなくなり、自然堆積によって池は埋もれていくだけとなっている。また、池ノ尾門跡では石塁の中央下部に設置された暗渠状の通水溝内からこの時期の土器が詰まった状態で出土し、鞠智城Ⅳ期には通水溝の機能が低下していたことが明らかとなっている（西住ほか編2012）。
- (8) 鞠智城の建物変遷や土器編年については、今後も検討を続けていく必要がある。
- (9) 『日本文徳天皇実録』天安2（858）年6月条には、「同城不動倉十一字火」とあり、9世紀中頃には

鞠智城内に稲穀貯蔵用の倉庫（不動倉）が少なくとも 11 棟あったことがわかる。また、『日本文徳天皇実録』天安 2（858）年 6 月条には「肥後国菊池城院兵庫鼓自鳴」、『日本三代実録』元慶 3（879）年 3 月条には「肥後国菊池郡城院兵庫戸自鳴」とあり、不動倉の他に兵庫も存在したことがわかる。

- (10) 佐藤信氏も鞠智城の倉庫群に貯蔵された稲穀が基肄城のものと同様、西海道の諸国に班給された可能性について言及されている（佐藤 2010）。
- (11) 『日本文徳天皇実録』には天安 2（858）年閏 2 月条の記事として、「丙辰。肥後国言。菊池城院兵庫鼓自鳴。丁巳。又鳴。」とあり、同年 6 月条の記事として、「肥後国菊池城院兵庫鼓自鳴。同城不動倉 11 宇火。」とある。『日本三代実録』には元慶 3（879）年 3 月条の記事として「肥後国菊池郡城院兵庫戸自鳴。」という記載がある。なお、これらの記事における鞠智城の表記は「菊池城院」、「菊池郡城院」となっているが、ほぼ同時期の太政官符（『類聚三代格』巻 18 貞観 12（870）年 5 月 2 日太政官符「応交替検定府庫器仗事」、『類聚三代格』巻 18 貞観 18（876）年 3 月 13 日太政官符「応大野城衛卒粮米依旧納城庫事」）では、大野城の表記は「大野城」とあり、「院」の文字はつかない。これは、城としての機能を 9 世紀になっても維持し続けた大野城と、鞠智城Ⅳ期以降、城から倉庫群としての機能に変化した鞠智城の性格の違いを示した可能性もあるのではないだろうか。

〈引用・参考文献〉

- 阿南 亨編 2012『万太郎遺跡 森北院ノ馬場・迫畑遺跡』菊池市文化財調査報告第 6 集
- 網田龍生 1994「奈良時代 肥後の土器」『先史学・考古学論究 熊本大学文学部考古学研究室創設 20 周年記念論文集』 龍田考古会
- 網田龍生 1997a「肥後における古代後半期の墳墓」『先史学・考古学論究Ⅱ 熊本大学文学部考古学研究室創設 25 周年記念論文集』 龍田考古会
- 網田龍生 1997b「肥後における竪穴住居の終焉」『肥後考古』第 10 号 肥後考古学会
- 網田龍生 1999「9 世紀の土師器坏」『池辺寺跡Ⅱ—平成 8・9 年度発掘調査報告書—』 熊本市教育委員会
- 網田龍生 2012「肥後地域の様相」『第 61 回埋蔵文化財研究集会 集落から見た 7 世紀—律令体制成立期前後における地域社会の変貌—発表要旨資料』 埋蔵文化財研究会
- 網田龍生 2013「熊本市大江遺跡群の水田」『熊本史学』第 97 号 熊本史学会
- 板楠和子 1998「古代国家の形成・律令国家と肥後国・平安時代の肥後」『新熊本市史』通史編第 1 巻 熊本市
- 板楠和子 2011「鞠智城の歴史的背景」『鞠智城とその時代—平成 14～21 年度「館長講座」の記録—』 熊本県立装飾古墳館分館歴史公園鞠智城・温故創生館
- 板楠和子 2012a「律令国家の成立」『荒尾市史』通史編 荒尾市
- 板楠和子 2012b「「肥後国」と「鞠智城」」『鞠智城跡Ⅱ—鞠智城跡第 8～32 次調査報告—』 熊本県文化財調査報告第 276 集
- 浦田信智編 1993『八反田 A・B 遺跡 八反畑遺跡』西合志町文化財調査報告第 3 集
- 浦田信智編 1995『迫原遺跡』西合志町文化財調査報告第 5 集
- 江本 直編 1993『岡田』 熊本県文化財調査報告第 135 集
- 小田和利 1996「製塩土器からみた律令期集落の様相」『九州歴史資料館研究論集』21 九州歴史資料館
- 小田富士雄 1993「熊本県・鞠智城をめぐる諸問題」『考古論集—潮見浩先生退官記念論文集—』 潮見浩先生退官記念事業会
- 菊鹿町史編纂委員会編 1996『菊鹿町史』本編 菊鹿町史編纂委員会

- 木村龍生 2011「鞠智城跡の古墳時代後期後半の集落について」『熊本古墳研究』第4号 熊本古墳研究会
- 工藤敬一 1985「古代・中世」『山鹿市史』上巻 山鹿市
- 熊本県教育委員会編 1977『熊本県の条里』熊本県文化財調査報告第25集
- 桑原憲彰・野田拓治編 1977『赤星福土・水溜遺跡』熊本県文化財調査報告第27集
- 甲元眞之 2006「鞠智城についての一考察」『肥後考古』第14号 肥後考古学会
- 後藤貴美子編 2001『坂口遺跡・石清水遺跡』熊本県文化財調査報告第201集
- 後藤貴美子・宮崎敬士編 2003『伊坂上原遺跡・ワクド石遺跡・城ノ原遺跡』熊本県文化財調査報告第213集
- 坂本経堯 1937「鞠智城址に擬せらる米原遺跡に就て」『地歴研究』第10篇第5号
- 坂本経堯 1965「住吉日吉神社の木造神猿」『熊本県文化財調査報告(菊池地方)』第5集 熊本県教育委員会
- 坂本憲昭編 2003『前畑遺跡』旭志村文化財調査報告第5集
- 坂本憲昭編 2003『伊坂東原遺跡』旭志村文化財調査報告第6集
- 坂本憲昭編 2004『栄ノ平遺跡』旭志村文化財調査報告第7集
- 坂本憲昭編 2004『伊坂上ノ原遺跡』旭志村文化財調査報告第8集
- 佐藤 信 2010「古代史からみた鞠智城」『古代山城 鞠智城を考えるー2009年東京シンポジウムの記録ー』山川出版社
- 高木正文 1990「熊本県菊池郡七城町うてな遺跡」『日本考古学年報(1988年度版)』41 日本考古学協会
- 高見 淳編 2001『小迫遺跡』七城町文化財調査報告第1集
- 鶴嶋俊彦 1997「肥後国北部の古代官道」『古代交通研究』第7号 古代交通研究会
- 鶴嶋俊彦 2004「肥後国」『日本古代道路事典』八木書店
- 鶴嶋俊彦 2011「古代官道車路と鞠智城」『古代東アジアの道路と交通』勉誠出版
- 富田紘一 2001「原始・古代の泗水町」『泗水町史』上巻 泗水町教育委員会
- 西住欣一郎編 1992『うてな遺跡』熊本県文化財調査報告第121集
- 西住欣一郎 1999「発掘からみた鞠智城」『先史学・考古学論究』Ⅲ 龍田考古学会
- 西住欣一郎・矢野裕介・木村龍生編 2012『鞠智城跡Ⅱー鞠智城跡第8～32次調査報告ー』熊本県文化財調査報告第276集
- 野田拓治 1998「熊本県鹿本町・御宇田遺跡群の官衙遺構」『古代文化』第50巻第5号 古代学協会
- 古城史雄・古森政次編 2001『岩瀬・木柑子遺跡』熊本県文化財調査報告第198集
- 古森政次編 1994『ワクド石遺跡』熊本県文化財調査報告第144集
- 帆足俊文編 2001『瀬戸口横穴墓群 深川遺跡』熊本県文化財調査報告第193集
- 松村一良 1991「西海道の官衙と集落」『新版古代の日本 第3巻 九州・沖縄』角川書店
- 松本雅明 1965「菊池市西寺の土壁ー菊池郡家参考地ー」『熊本県文化財調査報告(菊池地方)』第5集 熊本県教育委員会
- 松本雅明編 1985『日本歴史地名大系第44巻 熊本県の地名』平凡社
- 向井一雄 1991「西日本の古代山城遺跡ー類型化と編年についての試論ー」『古代学研究』125 古代学研究会
- 村井眞輝・島津義昭編 1986『伊坂上原遺跡 石佛遺跡』熊本県文化財調査報告第78集
- 吉田正一編 1994『大久保遺跡』熊本県文化財調査報告第143集
- 吉田正一編 1998『篠原遺跡』泗水町文化財調査報告第3集

〈挿図・表出典〉

第1図：筆者作成

第2図－1：西住編 1992 2：高木 1990 3：江本編 1993 4：帆足編 2001 5・6：桑原・野田編 1977 7：阿南編 2012

第3図－8：村井・島津編 1986 9：坂本編 2003 10：坂本編 2003 11：坂本編 2004 12：古森編 1994

第4図－13・14：浦田編 1993 15：浦田編 1995 16：吉田編 1998 17：高見編 2001

第5図－18：野田 1998

第1表：筆者作成

第2・3表：板楠 1998 を一部改変

第4表：西住ほか編 2012